16　牡丹孔雀図　円山応挙　一幅

絹本着色　江戸時代（安永五年―一七七六）
本紙一三〇・五×九九・〇

円山応挙（一七三三～九五）も、初め、狩野派に学び、古典を学習した。そして中国画、西洋画、琳派などの研究も行ない、自然の写生を習熟して独自の写生画様式を確立し、画壇の第一人者となり、円山派と呼ばれる画派の祖として、多くの弟子を輩出した。京都画壇における彼の名声は高く、内裏の障屏画も多く手がけている。

孔雀は、それまでにも多く描かれている画題であるが、舶載された中国画や古画を手本として描いたものが少なくない。それらに比べて本図のような応挙の孔雀は、実物を写生したかと思われるように、細部表現が豊かで、特に羽の質感は見事である。江戸時代、十八世紀は博物主義が盛んになり、文化人を中心に、動植物の描写はそれまでの狩野派などの粉本主義に飽き足らず、よりそのものに近い自然な描写が追及された時期でもあった。牡丹と孔雀という、中国の吉祥画の影響を受けたこの画題を、応挙は写生的な画風で、堂々とした大作に仕上げている。この後、応挙に学んだ者、応挙の影響を受けた者の多くは、孔雀を描いている。それほど、多くの画師たちの眼を、感性を刺激するものであったのであろう。

応挙も、江戸という時代の画壇において、古きよきものを生かし、新しい感性で輝いた画師であった。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

江戸の美意識 ― 絵画意匠の伝統と展開
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 28

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十四年三月二十六日発行

©2002, Museum of the Imperial Collections